

樹の声
海の声

上

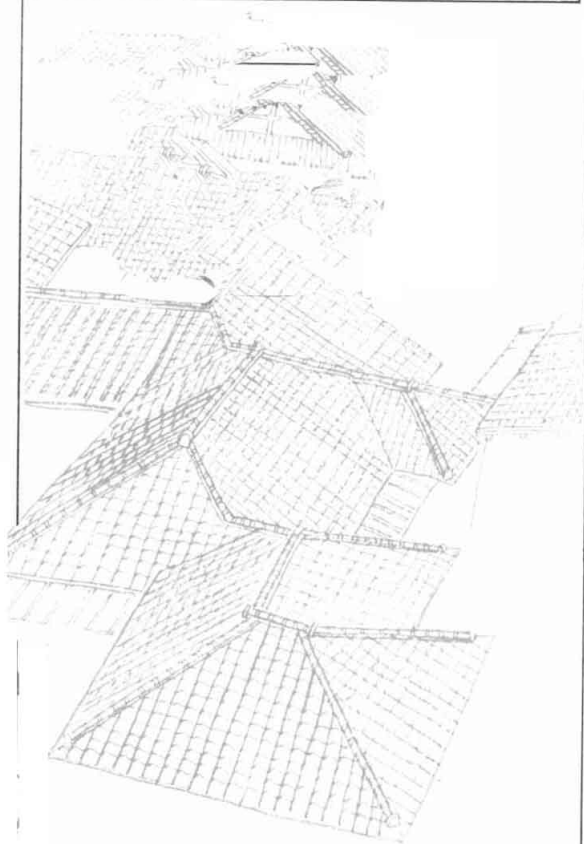
辻邦生



樹の声 海の声

上

辻 邦生



朝日新聞社

樹の声 海の声

(上)

© Kunio Tsuji 1982, Printed in Japan.

発行 1982年 4 月20日第1刷

著 者 辻 邦 生

発行者 初山有恒

発行所 朝日新聞社

郵便番号 104

東京都中央区築地 5-3-2

電話 (03)545-0131(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京 0-1730

装 画 小泉淳作

装 幀 中島かほる

印刷所 大日本印刷株式会社

定 価 1800円

0093-254988-0042

樹の聲 海の聲

一九八二年 朝日新聞社刊

A nouveau jour, nouvel émoi.

C'est ma devise.

Ah, c'est merveilleux la vie, nous ne trouver pas!

Et ce qu'il y a de plus merveilleux,

c'est qu'elle ne dure pas toujours.

Colin Higgins "Harold et Maude"

一日に一つ、何か新しい心のときめきを、

というのが私のモットーなの。

生きているって、すばらしいことだわ。

でも、人間で、いつまでも生きられないから、

生きていることが、もっとすばらしくなるのね。

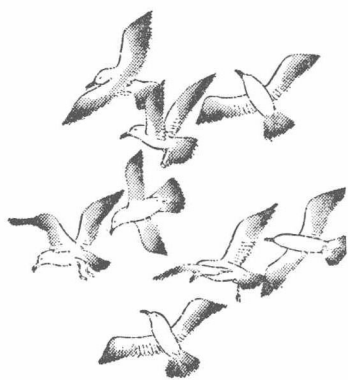
《コリン・ヒギンズ『ハロルドとモード』より》

樹の
声
海の
声
(上)

一九七八年十一月三日号～一九七九年十一月二日号「朝日ジャーナル」連載

序

章



私が自分のささやかな生涯を思い返してみようと思ったのは、もう今から十年以上も前のことになります。それは終戦後間もない初冬のある日のことでした。たまたま何か食糧と交換する衣類でもないかとトランクのなかを捜していた私は一冊の古いノートをそこに見つけました。かなり厚みのある、花飾りの空擦しのついた、革装の、止め金で閉じるようになった瀟洒なノートでした。

私はそれを取り出し、ぱらぱら頁をめくり、半分ほど使われているのを見て、半ばがっかりし、半ば腹立たしい気持を感じました。もし全部真っ白なら、闇市に持ってゆけばかなりの金に換えられるし、紙の払底していたときだったので、米屋でも何でも交換に応じてくれたに相違なかったからです。

しかしこんなインクのしみだらけの古ノートでは、いかに革装でも、瀟洒でも、どうすることもできません。私は舌打ちをしてそのままノートを洋服單筒の上にほうり投げておきました。

それから何日か私はノートのことを忘れていました。

その日は朝から氷雨が降りしきっていました。当時、ある労務関係の仕事をしていた私は、雨の日は休みて、朝か

ら何となく打ちひしがれたような気持ちになっていました。私は家のなかでも、昔パリで買った毛皮の外套を肩に羽織って、知人から貰った駐留軍関係の翻訳の仕事をしていました。とにかく昼も夜も働かなければ私も良人も生活することはできなかつたのです。火の氣のない部屋は氷室のようでした。

時どき眼を上げて窓の外に降る雨を見てみると、何か八方塞がりのような、理由のない疲労と絶望感が胸の奥に滲んできて、翻訳のペンを走らせる力がなくなるのを感じました。割れた窓ガラスからは水雨に濡れた凍ったような風が吹き込んでいました。知人の家財道具を隅に積んである暗い間借りりの六畳の部屋には、背中をまるくして何か書いている良人の破れ外套を着た後姿が見えました。

私たちは三月の大空襲で何もかも失っていました。辛うじて持って逃げたトランクとボール箱（そのなかに私たち夫婦の記念写真やら書類やらが入っていた）が唯一の財産でした。私は空襲の翌日、焼跡にいて、何一つ形の残らぬ黒焦げの空地のなかに、一塊りの白っぽい灰を見つけました。それは机の上に残してきた私のモーパッサンの翻訳原稿と良人が書きためた詩や散文の原稿の燃えがらでした。もちろんそんなものが焼け残るとは思っていたわけではありませんが、戦時中ずっと特高警察の不愉快な監視の眼を盗んでせせとつづけていた仕事だっただけに、さすがにこの紙束の灰を見ると、不運の刻印がそこに捺されている

ようで、不覚にもその場に坐りこむと涙が溢れるのをどうすることもできませんでした。

この翻訳原稿さえあれば、戦争が終って出版事情が好転したとき、まっさきに本にすることができたでしょう、そこにはバリで過した十年の思い出が何かの形で影を落していました。アラン・トルネー先生と最初に一緒に読んだのがモーパッサンでしたし、リュクサンブール公園の木蔭のベンチで好んで読んだのもモーパッサンでした。言ってみればその翻訳は私の過去の思い出と未来への希望を一行一行に塗りこめるようにして進められていた仕事でした。それが一瞬にして燃えつきていたのです。

風が吹くたびに、焼跡のその紙束の灰は、一枚一枚と崩れ、ぼろぼろになって飛び散っていきました。私は希望がそんなふうに焼け、崩れ、飛び散っているのだ、と思って、紙束の、銀灰色に縮んで反りかえった灰を見つめています。そこには書き綴った字が、なおはっきりと読みわけることができたのです。

焼け出されてみると、もう翻訳どころではありませんでした。親戚に同居させて貰って、肉体労働でも何でもやるほかなかったのです。私は満員の電車にぶらさがったり、焼跡の町々をうろついたりして、知人や友達を訪ねました。もちろん見舞いという意味もありましたが、仕事捜しも兼ねていました。何とか生きなければならなかったのです。

外国国籍の良人はもはやこの際何の役にも立ちませんでした。特高警察に痛めつけられていた良人は、終戦になって、その苦痛からは解放されたものの、以前からの神経症はいっそうひどくなっていました。良人は頑なに机に向ってわけのわからぬものを書く以外に何一つしようとはしなかったのです。

このあとどうやって生きてゆけばいいのか——暗い予感しかありませんでした。駐留軍関係の翻訳も、知人のまた知人からの下請で、労力の割には手に入る金はわずかででした。焼跡整理の肉体労働もそういつまでも続くわけがありません。失業はもう眼の先に迫っていました。たまたま人の好意で貸して貰ったこの家だっていつ追い立てられるかもしれないなかったのです。私は自分が暗い井戸の底に落ちてゆくような気がしました。

そのときふと私は、数日前に見つけた古いノートのことを思い出し、何となくそれをのぞいてみようという気になったのです。

それは私がバリに着いて間もない頃の日記で、開くと、リュクサンブール公園の木洩れ日がそのまま頁に映っているような気持になりました。思えば、それが書かれてからそのときまで二十年の歳月が流れていました。その日記が書かれたあと、良人と結婚し、ポーランドに住み、ドイツ軍のワルシャワ包囲戦を経験し、着のみ着のままヨーロッパからの最後の引揚船で日本に帰り、戦争となり、そして

戦災に会った、と、こういうわけで、その頃までの二十年は私にとって重い歳月だったのです。

私はむしろ茫然とした気持ちで古い日記を読んでいた。懐かしい思いよりも、そこに書いてあることがほとんど自分の記憶から消えているのに驚き、ある悲哀が心の底に澱んでくるのを感じました。

それを読んでいると当時住んでいたモンバルナス界限の気分が昨日のことのように蘇ってきました。アバルトマンの入口の重い黒塗りの鍛鉄たんてつの扉や、切石を並べた玄関口や、清潔な中庭にあったマロニエの大木の下の子の大理石像などが、落葉の匂いや湿った土の匂いととも、はつきり浮び上ってきたのです。日記には簡単なスケッチが入っていたので、私がよく腰かけて見た窓からの眺め——向いのカフェの赤い日除けの色や、小公園スツッパの木々や鉄柵や、上塗りの剝げ落ちた古いホテルの壁など——は、実際そこに見ているように思い描くことができました。

それは私にとっていわば第二の青春と呼んでもいい時期でした。前の良人との長い別居生活のあと、ようやく離婚が成立し、私は兄を頼ってバリにいったのです。

朝、透明な光が射してくると、私は近所のバン屋でクロワサンを買い、香りのいいコーヒーをいれて兄の目覚めを待ちました。春には窓の上で鳩がぐうぐう鳴き、コーヒーの爽やかな香りが、窓際のアネモネに射す光のなかで、まるで縞になって漂っているように感じられました。兄が起

きてくると、私は復活祭の休みに出かける予定のギリシアやフィレンツェの話をしました。その旅行は結局は実現しませんでした。それでも自由というものがこれほど楽しく、これほど素晴らしいものであるとは私には信じていることができました。通りを歩く通勤者たちにも、すでに仕事にかかっているホテルの水道の修理工にも、カフェで立話しているベレー帽の老人たちにも、私は思わず上機嫌な朝の挨拶を送らないわけにはゆかなかったのです。

人生は美しく楽しく見えました。町々の上を鳩が群れて飛んでいました。朝の太陽が鳩たちの胸毛をいっせいにばら色に染め上げていました。

日記の一頁一頁から若い私の喜びが水しぶきのように飛び散っているのです。それは、氷雨の降る暗い間借りの部屋で読むにはあまりに明るい世界です。それを読みつづけるのはある種の苦痛がありました。私にそんな幸福な時期があったとは信じられなかったのです。

しかしそうして読んでゆくうち、日記の文章が、ある一日を境にして、突然変わりました。どの頁もどの頁も、若い私の不安と困惑で埋っていました。ある頁はただ「信じられない、信じられない、信じられない」としか書かれていないのです。そしてしばらくして日記の文章は途切れ、その後完全に放棄されていました。日記は白いままついに埋められることはなかったのです。

私はそこまできて、当時私たち兄妹を襲ったあのいまわ

しい横領事件の思い出が痛みの記憶のように、なまなましく蘇ってくるのを感じました。それは私たち兄妹の財産を管理していた兄の親友が、自分の投機の失敗を穴埋めするため、それを横領した事件で、被害は私たち以外にも及んでいたのです。

この事件によって、私たちは突然無一文に近い境涯に転落しました。当時、兄もまだ収入の道などなく、あと二十年は父の遺産を食いつないでゆくつもりでした。兄はバストゥール研究所で微生物の研究をつづけているところでした。

当然兄の受けた衝撃も少くありませんでした。しかし私にはそんな気配は見せず、必ず何とかなるから安心するようにと繰返して言ってくれました。

日本には母が残っていました、二人の相続分はすでに別に分けられていたので、送金を頼むことはできませんでした。

この事件の直後、私はもう一つ不幸な出来事を経験しました。それは、ヴェーゼル大尉と呼ぶフランス空軍将校の死でした。私はこのヴェーゼル大尉に会ったおかげで、自殺しようと思いつめた不安感から救われたのです。その救いの主のような人が死んだのです。私はいつそう暗い窖の中へ落ちてゆくような気がしました。それは実に実に苦しい日々の連続でした……。

私は古い日記を閉じると、重い溜息をついたのです。窓

の外には相変らず氷雨が降りつづけていました。頑なにもを書いてある良人、狭い間借りの部屋、凍るような寒さ、割れた窓ガラス——何一つ変っていません。まるで夕方のような暗さだ、と私は独りごとを言いました。

私は、日記の中の明るいバリから氷雨の降る東京に転落したことを、つくづくと感じました。それは転落という以外には言いようのない気持でした。しかし同時にどこか心のなかに、解きほぐれてゆかない妙なしこりのようなものが残っているのに気がつきました。不満というのではありませんが、幾らか苛々した、腹立たしいような、釈然としない奇妙な感情でした。

しばらくそれがどこから生れてくるのかわかりませんでした。私は革装の表紙に薄い凹面をつくっている花模様の空捺しを指でなぞりながら、なぜそんな気持を味わっているのか考えていました。

そのとき突然、私は、バリにいた頃不運であるわけはなかった、という思いに刺し貫かれたのです。それは誰かが耳もとではっきりと「お前は不幸ではなかったのだ」と言ったのを聞いたような感じでした。私自身にも意外だったこの言葉が心の中をかすめたのは、指先の空捺しの凹面の花模様の感触が、バリでの私の若さや、花の匂いに満された春の町角や、石だたみを濡らして流れる清掃用水のきらきらした流れや、鳩の飛翔や、早朝の匂いを、突然、目の前にあるもののように、私の感覚のなかに呼び起した瞬間

でした。それは呼び起すというより、その過去の日にもう一度立ちかえるという趣がありました。感覚的に私は二十年前のバリにもう一度立ち戻っていたのです。そしてそう感じた瞬間、私がかつて、財産を失いヴェーゼル大尉の死に会ったときですら、幸福だったという思いが、まったく何の理由もなく、突然、白い光となって私の身体を貫いていったのです。

私は正直申しまして一瞬間ぐらいました。それは不意打ちを受けたような感じでした。私はそれをどう説明していいのかわかりませんでした。

私はながいこと、心の底で、生涯で最も不運だったのはこの財産を横領された瞬間だと思って生きていました。その後の不幸はすべてこのときの不運に由来すると信じていました。

それなのに、突然、理由ない力が、そうした思いを打ち砕き、私が、財産を奪われてもなお、幸福であった、と告げているのです。

私は突然立ち上りました。私はある不可思議な喜びの感情に包まれていました。外には水雨が降りつづけ、良人は暗くうずくまり、部屋は相変らず水室のように寒かったのですが、私には、なぜか、そうしたものがそれほど苦になりませんでした。今までとは違った不思議な勇気が身体のかなかに生れていました。何か軽やかなもの、晴ればれしたものが心に満ちてくるのを感じました。

私は立ち上って見たものの、その気持をどう説明したらいいのかわかりませんでした。私はふたたび机の前に坐ると、過去からの声を聞かのように、じっと自分の前の虚空を見つめていました。

私が自分の生涯を思い返してみようと思ったのは、そのときでした。バリのこのささやかな思い出が、これほど私を勇気づけ、すべてを変えてくれるのなら、バリにくるまで私が辿った生涯のなかに、どれほど今の私を慰めてくれるものがあるか分らない——私はそう思いました。

もちろん別居時代の思い出など、苦いことばかりですが、バリの苦しかった頃の思い出でさえ、別の光に照らされると、こうも違って見え、かえって生きる力呼び起す原動力になったのです。きつと、そうやって生涯を思い起してゆけば、それだけで、私に何か光のようなものを与えてくれるにちがいない——そんな気がしたのでした。

私は、そのときすぐにも翻訳の原稿をかたわらに押しやって、思い出を書きたい衝動を感じました。しかし翻訳には生活がかかっておりまして、期日も迫っていましたので、そうした衝動に身を委ねるわけにいきませんでした。

私は書きくずしの原稿用紙の裏に、そのとき胸にこみ上げていた思いを大急ぎで書きとめました。それを読めば、いま胸元に衝きあげている熱い気持を、すぐに、なまなましく思い出せるように、私は、散文詩に似たような形で書きとめたのです。

その後、私は何度かこの走り書きの散文詩を読みました。多少色は褪せましたが、そのたびに、その初冬の氷雨の日、私を横切っていった心のささやかなドラマを思い出しました。そしていつか時間さえ許すようになったら、自分の生涯を細かく思い出して、もう一度、生涯を生き直してみよう、と思いました。

もちろんこの世に何十億の人々が住んでいます。歴史の上で死んでいった人間たちの数を考えたら、それは数えられるものではありません。そしてその人々はすべて、一人ひとり例外なく、かけがえない人間の一生を生きているのです。成功した人も、不運に終わった人も、平穏な生を送った人も、波乱万丈の運命を生きた人も、それぞれに取り替えられぬ人生を持っているのです。どの人生が、他の人生より、とりたてていいと言えないのは、それぞれが掛け替えな一回きりの貴重な生であるからです。

ですから、私が自分の生涯をふり返ってみようと思ったのは、決してそれが人並すぐれているとか、何か特別に語るに足るものがあるかと思っただけではありません。もし私の生涯の出来事を読んで下さる方があれば、何ら変わった冒険も珍しい事件もないので、がっかりなさることでしょう。せめて変っているのは、当時にしてはめずらしく外国で長いあいだ暮したことで、歴史に残るような方々たちを人生の折々に垣間見ることができたことぐらいです。

私が生涯を思い返そうと思ったのは、実は、人の一生と

いう形で、生きているあいだは見出すことのできなかった何かが、現われているのではないか、と思われたからです。ちやうどバリーで財産を失ったとき、私はただ不幸を嘆くほかなかったのに、それから二十年たった後では、それは不幸であつたどころか、若さとか、希望とか、バリーの季節ごとの空気とか、旅への憧れとかを通して深い幸福を味わっていたことがわかったように――。

私はこんなふうに思いました――もし一生をただ夢中で過して、それっきりにしておいたら、こうして「生涯」という形で表わされているものを見過して終るのではないか。それは興味深く面白くもある本を傍らに置きながら開いてみようとしないうちに似ていてはいないか。もしそれを読みさえすれば、単に生きたというだけではなく、人生とは何だったのか、苦しんだり悩んだりしたのはどういう意味があつたのか、そもそも人が生きたり死んだりするのは何なのか、そういうことが理解できるのに、それに気づかずにいるのと同じではないか……。

そう思いはじめますと、私はそれまで生涯を細かく思い出そうとしなかったことが、ひどく怠慢な行爲に見えました。大事な、貴重なものが、すぐ手に入るのに、それを放つたらかしているような、勿体ない、投げやりな生活を送っているように見えたのです。

幸いしばらく前から私はある私立大学で講師の職を得ることができました。生活も前ほど追いついてられることはな

くなりました。それである日、思い切って、ごくごく生涯の初めの、記憶もまだ定かでない幼少期の回想から書きはじめることにしました。

私はごく大まかなメモを書いてみました。しかしそれを書きとめてゆくうち、生涯の個々の出来事や情景のなかに、私が思ってもみなかった言葉が、まるであぶり出しの文字のように、浮き上ってくるのに気がつきました。私は何カ月もたってから筆をとめました。こうしたいわゆる普通の回想録風の記録では、実は何も書かないに等しいというところが次第にはっきりしてきたからなのです。私はそこで思い切って、それまで書いていたメモ風の思い出を破棄して、もっと徹底的に詳細な、心の裏の奥の奥に込み込んだ記憶まで探り訪ねて描くようなやり方で思い出の中に入ってゆこうと決心しました。そうでなければ私の目的は半分も達せられないだろうと思われたからです。

はたしてこれから取りかかろうとする仕事が私の期待にこたえてくれるかどうか今のところ分りません。それに思い出のなから浮び上るあぶり出し文字で書かれた事柄がどんなものであるかも定かではないのです。ただそれを浮び上らせるにはどんな細部もはぶくことなく、正確精密に物語るといふほかないということだけが今の私に分っているのです。

